

# 死別体験の有無および死に対する態度と

## 「死」のイメージとの関連

尾方 綾・岡本祐子

Relationships among experience of bereavement, attitude toward death and images of death

Aya Ogata and Yuko Okamoto

本研究では、死別体験について、死別をどのように体験し、どのように向き合っているのかを検討するため、重要な他者との死別体験の有無、および「死」「生」「自己」の捉え方のパターンによる死のイメージの質的な違いを、TATの12M図版と15図版に対する語りの違いから検討することを目的として調査を行った。「死」「生」「自己」の捉え方のパターンについては、各概念間の心的な距離を測定し、クラスタ分析を行った。その結果、「死」と「自己」のみを離す“「死-自己」分離群”、「死」を「生」「自己」から離す“「死」分離群”、「死」「生」「自己」を全て離す“全分離群”、「死」「生」「自己」を全て近いものとする“全近接群”の4クラスタが抽出された(死-生-自己マトリクス)。死別体験がある者となない者のTAT反応の特徴を比較した結果、死別体験がある場合、「死」を具体的にイメージし、死者と関わり続けるあり方が見られた。また、死-生-自己マトリクスの各群において、「死」「生」「自己」の近さや遠さの体験に特徴が見られた。

キーワード：死生観、死別体験、死のイメージ、TAT

### 問題と目的

#### 1. 死別体験と喪の作業および悲嘆のプロセス

重要な他者との死別に代表される、愛着や依存の対象の喪失は、対象喪失 (object loss) と呼ばれる。小此木 (1979) は、対象を失うことの悲しみをどう悲しむかは、人間にとって永遠の課題であるとしている。Freud (1926 井村訳 1970) は悲哀について、現実検討によって愛する対象がもはや存在しないということが分かり、すべてのリビドーはその対象との結びつきから離れることを余儀なくされるとするが、これに対し当然反抗が生ずるとし、時間と充当エネルギーをたくさん消費しながら、ひとつひとつ遂行してゆくのであって、その間、失われた対象は心の中に存在しつづける。悲哀の作業が完了したあとでは、自我はふたたび自由になって、制止もとれるとしている。

これまで理論化されてきた死別体験後の悲哀のプロセスは、大きく段階的モデルと課題モデルに

分けられる。段階的モデルに代表されるのはデーケン (1996) の「12 段階のモデル」であり、①精神的打撃と麻痺状態、②否認、③パニック、④怒りと不当感、⑤敵意とルサンチマン、⑥罪悪感、⑦空想形成と幻想、⑧孤独感と抑うつ、⑨精神的混乱とアパシー、⑩あきらめ、⑪新しい希望、⑫立ち直りの段階、を挙げている。課題モデルは、Worden (1991 鳴澤訳 1993) の「悲哀の 4 つの課題」が挙げられる。①喪失の事実を受容する、②悲嘆の苦痛をのりこえる、③死者のいない環境に適応する、④死者を情緒的に再配置し、生活をつづける、という課題が悲哀の作業の完了まで互いに絡み合って進行するとされる。段階的モデルと課題モデルの両者を含めたモデルとして、信原 (1997) は、中年期の突然の死別者を対象とし、悲哀の特徴に、①実感の希薄さとやり遣し感、②悲哀の遅延と否認による適応への努力、③死者の理想化、④男性の喪の作業の困難さ、⑤中年期の死別における子供の存在という側面があることを明らかにし、悲哀の心理過程モデルを作成している。

死別体験の悲哀のプロセスに関する各モデルは、対象喪失にまつわる悲哀の作業における「状態像」に関するものであり、悲哀のプロセスの研究では、死別体験をした人がどのような様態をたどるかに焦点を当てたものが多い。では、死別体験の悲哀を「乗り越える」とはどういうことだろうか。そのことを考えるには、「乗り越える」にいたるプロセスにおいて、死別体験をどのように捉えるかという側面や、死生観の確立や変化を生じさせたり、死について改めて捉えなおしたりする側面を検討する必要がある。

## 2. 死別体験と死への心的態度

これまで、死別体験と死に対する態度の関連を検討する調査は多く行われているが、死別体験の有無と死に対する態度の関連について、一貫した結果は見出されていない。その理由として、亡くした対象などを調査者が限定していた点にあると考えられる。Worden (1991 鳴澤訳 1993) は喪失に対する反応を予測するには、だれを失ったかがわかるだけでなく、愛着についてわかっている必要があるとしている。つまり、死別者と死者との関係について、死別者自身がどのように捉えていたのかが、死別体験を検討する上で必要であると言える。

また、隈元 (2003) は、身近な人の死が個人にどのように経験され、主観的な生きる意味がどのように変化するか、死別体験をした被調査者に半構造化面接を実施した。その結果、死別体験によって、否応なく死に直面させられた人びとがどのようにそれに取り組むかということは、多くの困難を覚えながらも人間の根源的イメージに出会い、それによって日常生活に生きる自分自身の生の意味それ自体を変化させる体験であるとしている。つまり、悲哀のプロセスでは、死のイメージの変容や自分自身の生の意味の変化が体験されると考えられる。

以上から、死別体験を考える上で、死別者が死別をどのように体験し、死にどのようなイメージを持つのか検討することが重要であると考えられる。

## 3. 死の心的態度と死のイメージ

丹下 (2002) は、死生観の構造やその発達差を検討するため、「死」という語からの連想語を分類した結果、「死」に関連するカテゴリだけでなく、「生」に関するカテゴリも見出している。また、死に「ネガティブ」な反応だけでなく「ポジティブ」な反応も見られる研究 (藤井, 2003 ; 石坂, 2003, 2004 ; 丹下, 2002) や、死に肯定、否定の相反する両方を意味づける「アンビバレント」な

態度が見出された研究 (石坂, 2003) もある。

このような「死」や「生」の直接的なイメージを問う研究のほか、「死」や「生」を内界に位置づける際のより無意識的な視点を抽出しようとする研究がある。松下 (2000) は箱庭療法や描画法の基本理論の一つである Grünwald の空間象徴図式の実証的検討のうちの1つとして、空間に世界を感じ取る無意識的な視点を抽出している。図式に含まれる、「死」-「生」、「光」-「影」等の対になる象徴語 20 語に「自己」を加えた 21 語をもとにした 2 語 1 対、計 210 対について、各象徴語のイメージが本質的に近いか遠いかを、「1=本質的に同じ」から「25=本質的に異なる」までの 25 段階で評定してもらい、多次元尺度法で分析したところ、「生」と「死」が「自己」と近いものとイメージされる次元、「生」と「死」は「自己」とやや遠いものとイメージされる次元、「生」と「死」が互いに正反対のものとイメージされる次元の、3次元が抽出されている。

尾方・岡本 (印刷中) は、松下 (2000) の象徴語評定法を簡便化し、「死」「生」「自己」の3語をもとに、2語1対、計3対について、それぞれのイメージの本質的な近さ・遠さを25段階評定させ、クラスタ分析を用いて検討した。その結果、「死」「生」「自己」を全て近いとする全近接群、「死」と「自己」のみ離す「死-自己」分離群、「死」を「生」「自己」から離す「死」分離群、「死」「生」「自己」を全て離す全分離群の4群が抽出され、これを死-生-自己マトリクスと名づけている。また、死-生-自己マトリクスとSD法で見られる「死」「生」「自己」のイメージとの関連を検討した。その結果、全近接群は「死」にポジティブで身近なイメージ、「生」「自己」にネガティブなイメージを抱き、「自己」を「矛盾した」アンビバレントなものとして捉えていた。「死-自己」分離群も、「死」にポジティブなイメージを抱いていたが、「疎遠な」イメージも抱いていた。また、「生」にポジティブなイメージに加えて「不完全な」イメージを抱き、「自己」は「親しい」が「矛盾した」ものとイメージしていた。「死」分離群は、「生」「自己」をポジティブで近いものと捉え、「死」は明確で特徴的なイメージが見られなかった。全分離群は、「死」「生」「自己」それぞれに確固としたイメージがなかった。さらに、死-生-自己マトリクスと Templer (1970) の Death Anxiety Scale (DAS) の関連を検討した結果、全近接群は、「死」を身近に捉えることと意識上の死の不安の低さに関連がある可能性が示唆され、反対に「死」分離群は、「死」を日常から切り離すことで意識上の死の不安が軽減される可能性が示唆された。すなわち、同じように意識上の死の不安が低い者でも、無意識的なイメージ水準における死の捉え方は異なっている可能性があり、死に対する態度についても、死のイメージから検討する必要があるとしている。

この点に関し、松下・尾方 (2009) は、丹下 (1999) の「死に対する態度尺度」と、死-生-自己マトリクスを用い、重要な他者との死別体験を経た場合の死の捉え方を、意識レベルの死生観とより無意識的レベルの「死」「生」「自己」イメージから明らかにすることを目的とした調査を行っている。その結果、死-生-自己マトリクスによって死に対する意識的態度に差が見られた一方で、同じ死-生-自己マトリクスでも、「死」を「生」や「自己」と遠いとする場合、死別体験の有無によって、死に対する意識的態度に差が見られている。

#### 4. 本研究の視点

重要な他者との死別体験をどのように体験し、向き合っているのかを検討するためには、まず、

「死」をどのようにイメージしているのかを検討する必要があると言える。また、死-生-自己マトリクスは、「死」「生」「自己」の捉え方が「距離」として表れているが、「死」「生」「自己」が「遠い」「近い」とは何を意味するのであろうか。死-生-自己マトリクスの各群が、「死」をどのようにイメージしているため、そのタイプとなって表れるのかを検討することが必要である。

そこで本研究では、投影法である Thematic Apperception Test (TAT：主題統覚検査) を用いて、重要な他者との死別体験の有無および死-生-自己マトリクスの違いによって、死に対するイメージの違いがどのように表れるのかを検討する。TAT は、マレー (Murray, H. A.) を中心とするハーヴァード心理学クリニックのスタッフが 1943 年に完成させた人格検査法であり、絵に対し作られた物語から作り手のパーソナリティを推し測る技法である。赤塚 (2008) は、TAT 図版の客観的な刺激特性に被検査者の物語自己を背景においた主観的な体験を重ね合わせていくとし、このような客観と主観が重なり合った世界、客観的世界を主観的な体験というフィルターですくい上げたのが TAT プロトコールという形で表現された語り手の投映の世界であるとしている。すなわち、TAT 反応の中には、語り手の現実経験、また、それをどのように体験したのかという主観的な世界が投映されると考えられる。このことから、死別をどのように体験したのか、死や生をどのように感じているのかについて、TAT を用いて検討することは意味のあることと考えられる。

本研究では、死に関するテーマが表れるとされる 12M 図版と 15 図版を用いる。12M 図版は、若い男が目を閉じて長椅子に横になっており、やせこけた年長の男が彼の上に身体をかかめている図版である。ある宗教儀式、医師-患者関係、病人と看病者といったものがしやすい (山本, 1992) とされる。15 図版は、両手をぎゅっと握りあわせている不気味な男が墓石の間に立っている図版である。死んだ人に罪をわびにくる話や、愛する人や頼れる人を失ってひとり孤独になった話、また、老人の姿をみて、孤独、死に対する不安、老いに対する恐怖がテーマとなってでてくることもある (山本, 1992) とされる。

本研究では、重要な他者との死別体験の有無および、死-生-自己マトリクスのタイプによる死のイメージの質的な違いを、TAT の 12M 図版と 15 図版に対する語りの違いから検討することを目的とする。

## 方 法

### 1. 調査対象者

大学生および大学院生、男性 23 名 (平均 20.17 歳,  $SD=2.55$  歳)、女性 60 名 (平均 19.52 歳,  $SD=1.32$ )、合計 83 名 (平均 19.70 歳,  $SD=1.76$ )。

### 2. 材料

①「死」「生」「自己」のイメージについて、2 語 1 対からなる 3 対に対し、各イメージの主観的な非類似度を問う質問 3 項目。25 段階評定。②「大切な方との死別体験」に関する質問 6 項目。③TAT の 12M, 15 図版。

### 3. 手続き

集団法で質問紙調査を実施した後、面接調査に同意した被調査者に対し、後日個別法で TAT を用

いた面接調査を実施した。また、集団法による質問紙調査を実施していない被調査者に対しては、面接調査後に質問紙調査を実施した。実施前に紙面および口頭で、調査参加は任意であり、いつでも回答の拒否ができることを明示した。また面接調査の録音記録に同意した被調査者に対しては、同意書に署名の上、実施した。なお本研究は、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得ている。

TATの実施については、図版を提示する前に、「絵を見てお話を作ってください」というものです。絵の中に人物も出てきますので、その人物が何を考えているのか、どのようなことを感じているのかなど想像しながら、過去、現在、未来が含まれたお話を作ってください」と教示した。

## 結 果

### 1. 死-生-自己マトリクスの分析

死-生-自己マトリクスのタイプを抽出するため、「死」「生」「自己」の主観的な非類似度を問う3項目についてクラスタ分析(Ward法)を行った結果、4クラスタが抽出された。各クラスタの特徴を検討するため、「死」「生」「自己」の主観的な非類似度を問う3項目を従属変数とする分散分析を行った(Table 1)。

Table 1

「死」「生」「自己」の主観的な非類似度を問う項目のクラスタ分析の結果

項目		クラスタ1 「死-自己」分離	クラスタ2 「死」分離	クラスタ3 全分離	クラスタ4 全近接	F値	下位検定
死-生	平均値	7.35	18.21	13.92	3.17	90.26***	2>3>1>4
	標準偏差	3.90	4.57	7.85	2.23		
生-自己	平均値	8.46	5.66	20.50	8.44	67.66***	3>1, 4>2
	標準偏差	4.74	2.74	3.02	5.55		
死-自己	平均値	18.35	14.45	21.08	7.54	47.90***	3, 1>2>4
	標準偏差	3.24	7.26	3.46	4.43		

Note. \*\*\*  $p < .005$

クラスタ1は、「死」と「生」は近いが、「死」と「自己」は離している。クラスタ2は、「死」を「生」「自己」から離している。クラスタ3は、「死」「生」「自己」を全て離している。クラスタ4は、「死」「生」「自己」の全てが近いと言える。この結果は、尾方・岡本(印刷中)の結果を支持するものであり、以下、クラスタ1を「死-自己」分離群、クラスタ2を「死」分離群、クラスタ3を全分離群、クラスタ4を全近接群とする。Table 2は、各死-生-自己マトリクスと死別体験の有無の、調査参加者の人数の内訳である。

Table 2  
調査参加者の各群の人数

		死-生-自己マトリクス				合計
		「死-自己」分離	「死」分離	全分離	全近接	
死別体験	あり	15	19	4	16	54
	なし	13	6	3	7	29
合計		28	25	7	23	83

## 2. TAT 反応の分類の観点

12M 図版は、横になっている若者に死や病気を投射しやすいと考えられ、年長の男の行為や態度、感情から、死や病気に対する態度や関わりが見られると考えられる。15 図版は、墓場のような場面であり、「死」が連想されやすいと考えられる。そのような場面をどのように捉えるのかによって、「死」をどのように捉えているのか見ることができると考えられる。また、人物の態度から、死や死者に対する態度や関わりが見られると考えられる。以上を踏まえ、鈴木 (1997) を参考に、TAT 反応を以下の観点から分類した (Table 3, 4)。

Table 3  
12M 図版における分析の観点

		観点
横たわっている人について	状態	①「死」があるかどうか
		②死、病気、事故などがあるかどうか
		③治癒や蘇生など、改善があるかどうか
立っている人について	態度	④横たわっている人の死、病気などへ、抵抗しているかどうか
		⑤横たわっている人の死、病気などへの受容が見られるかどうか
	関わり	⑥立っている人が横たわっている人にどう関わっているか(積極的関わり - 関係を切る関わり - 関わりなし)
話りのテーマ		⑦「奪われる」というテーマが語られているかどうか

Table 4  
15 図版における分析の観点

		観点
場所について	状況	①どのような場所か(現実的な世界 - 空想の世界 - 言及なし)
立っている人物について	状態	②どのような人物か(生者 - 死者 - 人間以外の者)
	未来	③立っている人物の死を語っているかどうか ④立っている人物の生を語っているかどうか
墓の中の人との関係	関わり	⑤墓の中の人との関係があるかどうか
		⑥墓の中の人とどのような関係か(家族 - 加害者・被害者の関係 - 友人・大切な人 - 自分自身)
態度・感情	関わり	⑦墓の中の人(像)への関わりがあるかどうか
		⑧立っている人物が自分自身への関わりがあるかどうか
		⑨描かれている場面以外への関わりが見られるかどうか
	態度・感情	⑩供養などの行為があるかどうか
		⑪死や罰の受容、成仏などがあるかどうか
		⑫悲哀、絶望などの感情があるかどうか ⑬謝罪、反省、後悔、罪悪感などの感情があるかどうか ⑭死や罰への恐怖があるかどうか

### 3. TAT 反応の量的な分析

死別体験の有無や、死-生-自己マトリクスの各群による、死に対する無意識的な態度の違いを検討するため、TAT の反応内容について、群ごとに観点別に出現率を算出し、 $\chi^2$  検定またはフィッシャーの直接確率法で分析を行った。

#### 1) 12M 図版についての結果

(1) 横たわっている人の死、病気などへ、抵抗しているかどうか

立っている人物が、寝ている人の死や病気に対して、抵抗が、①見られるかどうか、②見られないかどうか、という観点から出現率を算出し、各群に偏りが見られないか検定を行った結果、②死や病気への抵抗が見られないかどうかという観点で、死別体験の有無で偏りが見られる傾向があった ( $\chi^2(1, 83) = 3.76, p < .10$ ) (Table 5)。残差分析の結果、死別体験あり群は死や病気への抵抗がないという語りが少なく、なし群は多い傾向が見られた。

Table 5

TAT の 12 図版に見られる「横たわっている人の死、病気への抵抗なし」反応と死別体験の有無との関連についての  $\chi^2$  検定の結果

		死や病気への抵抗 (なし-その他)			$\chi^2$ 値	自由度	残差分析
		なし	その他	合計			
死別体験	あり	10	44	54	3.76 <sup>†</sup>	1	- なし
	期待度数	13.66	40.33				
	なし	11	18	29			+ なし
	期待度数	7.34	21.66				
合計		21	62	83			

Note. <sup>†</sup> $p < .10$

#### 2) 15 図版についての結果

(1) どのような場所か

場所が、①現実的な世界か、②空想的な世界か、③場所について言及があるか、という観点から出現率を算出し、各群に偏りが見られないか検定を行った結果、③場所について言及があるかという観点について、死別体験の有無で有意な偏りが見られた ( $\chi^2(1, 83) = 5.80, p < .05$ ) (Table 6)。残差分析の結果、死別体験あり群は、場所を言及するものが有意に多く、なし群は少なかった。

Table 6

TAT15 図版に見られる「場所の言及の有無」反応と  
死別体験の有無との関連についての $\chi^2$ 検定の結果

		場所（言及あり-言及なし）			$\chi^2$ 値	自由度	残差分析
		言及あり	言及なし	合計			
死別体験	あり	54	0	54	5.80*	1	+言及あり
	期待度数	52.05	1.95				
	なし	26	3	29			+言及なし
	期待度数	27.95	1.05				
合計		80	3	83			

Note. \* $p < .05$

(2) 立っている人物の死を語っているかどうか

「自殺する」「死んでしまう」など、立っている人物の死を語っているかという観点から出現率を算出し、各群に偏りが見られないか検定を行った結果、死-生-自己マトリクスの違いによる偏りが見られる傾向があった ( $\chi^2(3, 83) = 6.91, p < .10$ ) (Table 7)。残差分析の結果、「死-自己」分離群は、立っている人物の死の語りが多い傾向が見られた。

Table 7

TAT15 図版に見られる「立っている人物の死」反応と  
死-生-自己マトリクスとの関連についての $\chi^2$ 検定の結果

		立っている人物の死への言及の有無			$\chi^2$ 値	自由度	残差分析
		あり	なし	合計			
死-生-自己 マトリクス	「死-自己」分離群	18	10	28	6.91†	3	+ あり
	期待度数	12.82	15.18				
	「死」分離群	11	14	25			
	期待度数	11.45	13.55				
	全分離群	2	5	7			
	期待度数	3.20	3.80				
	全近接群	7	16	23			
	期待度数	10.53	12.47				
		38.00	45.00				

Note. † $p < .10$

(3) 立っている人物の生を語っているかどうか

「1人で生きていく」「罪を背負って生きていく」など、立っている人物の生を語っているかという観点から出現率を算出し、各群に偏りが見られないか検定を行った結果、死-生-自己マトリクスで有意な偏りが見られた ( $\chi^2(3, 83) = 8.80, p < .05$ ) (Table 8)。残差分析の結果、「死」分離群は、人



物自身の生の語りが無い方が有意に多く、全近接群はある方が有意に多かった。

Table 8  
TAT15 図版に見られる「立っている人物の生」反応と  
死-生-自己マトリクスとの関連についての $\chi^2$ 検定の結果

		立っている人物の生への言及の有無			$\chi^2$ 値	自由度	残差分析
		あり	なし	合計			
死-生-自己 マトリクス	「死-自己」分離群	5	23	28	8.80*	3	
	期待度数	4.72	23.28				
	「死」分離群	0	25	25			- あり
	期待度数	4.22	20.78				
	全分離群	2	5	7			
	期待度数	1.18	5.82				
	全近接群	7	16	23		+ あり	
	期待度数	3.88	19.12				
		14	69	83			

Note. \* $p < .05$

(4) 墓の中の人 (像) への関わりがあるかどうか

立っている人物が墓の中の対象へ「語りかける」など、関わりがあるかという観点から出現率を算出し、各群に偏りが見られないか検定を行った結果、死別体験の有無で有意な偏りが見られ ( $\chi^2(1, 83) = 4.42, p < .05$ ) (Table 9), 死-生-自己マトリクスで偏りが見られる傾向があった ( $\chi^2(3, 83) = 7.23, p < .10$ ) (Table 10)。残差分析の結果、死別体験あり群は、関わりがある方が有意に多く、なし群は少なかった。「死-自己」分離群は、関わりが少ない傾向が見られた。

Table 9  
TAT15 図版に見られる「墓の中の対象への関わり」反応と  
死別体験の有無との関連についての $\chi^2$ 検定の結果

		墓の中の像への関わりの有無			$\chi^2$ 値	自由度	残差分析
		あり	なし	合計			
死別体験	あり	37	17	54	4.42*	1	+ あり
	期待度数	32.53	21.47				
	なし	13	16	29			- あり
	期待度数	17.47	11.53				
合計		50	33	83			

Note. \* $p < .05$

Table 10

TAT15 図版に見られる「墓の中の対象への関わり」反応と  
死-生-自己マトリクスとの関連についての $\chi^2$ 検定の結果

		墓の中の像への関わりの有無			$\chi^2$ 値	自由度	残差分析
		あり	なし	合計			
死-生-自己 マトリクス	「死-自己」分離群	12	16	28	7.23 <sup>†</sup>	3	- あり
	期待度数	16.87	11.13				
	「死」分離群	15	10	25			
	期待度数	15.06	9.94				
	全分離群	6	1	7			
	期待度数	4.22	2.78				
	全近接群	17	6	23			
	期待度数	13.86	9.14				
合計		50	33	83			

Note. <sup>†</sup> $p < .10$

(5) 死や罰の受容, 成仏などがあるかどうか

墓の中の人の死や, 立っている人物がこれから受ける罰に対する受容, 成仏など, 受容のテーマがあるかという観点から出現率を算出し, 各群に偏りが見られないか検定を行った結果, 死別体験の有無で偏りが見られる傾向があった ( $\chi^2(1, 83) = 3.76, p < .10$ ) (Table 11)。残差分析の結果, 死別体験あり群は, 受容のテーマがない方が多い傾向が見られ, なし群はある方が多い傾向が見られた。

Table 11

TAT15 図版に見られる「死や罰の受容, 成仏」反応と  
死別体験の有無との関連についての $\chi^2$ 検定の結果

		死や罰の受容, 成仏の有無			$\chi^2$ 値	自由度	残差分析
		あり	なし	合計			
死別体験	あり	10	44	54	3.76 <sup>†</sup>	1	- あり
	期待度数	13.66	40.34				
	なし	11	18	29			+ あり
	期待度数	7.34	21.66				
合計		21	62	83			

Note. <sup>†</sup> $p < .10$

考 察

1. 死別体験の有無による無意識的な死に対する態度の違い

1) 死別体験がある場合 死別体験がある場合, TAT 反応から以下のことが言えた。

①15 図版では, 「場所の言及」がある方が有意に多かった (Table 6)。「死」が連想される 15 図版

に具体的な世界観を投影することは、「死」を具体的にイメージしていると言える。

②15 図版では、「墓の中の対象への関わり」がある方が有意に多かった (Table 9)。このような語りは、死者を自分自身の中に描き、関わるという態度につながると考えられる。山本 (2010) は、故人の表象が登場する悲嘆夢が、喪の仕事や遺された人の人生にどのように影響を与えているかを検討し、夢を介して故人と再び出会えることが、遺された人にとって大きな喜びとなるケースがあることを指摘しており、このような体験について、悲嘆による外傷化を緩和する役割を果たし、生き甲斐にさえなっているのではないかと推察している。このように、死者とイメージの中で関わることは、死別を体験した者の特徴と言え、死別を乗り越える上で重要であると考えられる。

以下は有意傾向であるが、可能性として示す。

③12M 図版では、「横たわっている人の死、病気への抵抗なし」反応が少なく (Table 5)、15 図版では、「死や罰の受容、成仏」反応が少なかった (Table 11)。

以上より、大切な人との死別を体験した者は、「死」を具体的にイメージしていると言える。また、死者を自分の中に描き、関わり続けるというあり方が示された。一方で、有意傾向ではあるが、受容のテーマを語ることは少なく、「死」への抵抗の存在が示唆された。山本 (2010) は、故人が眼前にはもういないという事実を認識し受けとめる課題も、死別への「適応」の途上では避けて通れないとしている。「受容」や「受け入れる」ことは、死別を乗り越える上で重要であるが、「死」を事実として受け入れるだけでなく、死者と自身の中で関わり続けたり、「死」のイメージを自身の中で具体的に描いたりすることが、「受容」や「死を乗り越える」ことに繋がるのではないかと考えられる。

2) 死別体験がない場合 死別体験がない場合、TAT 反応から以下のことが言えた。

①15 図版では、「場所の言及」がない方が有意に多く見られた (Table 6)。死別体験がない場合、「死」のイメージを具体的には描きにくいと言える。

②15 図版では、「墓の中の対象への関わり」がない方が有意に多かった (Table 9)。

以下は有意傾向であるが、可能性として示す。

③12M 図版では、「横たわっている人の死、病気への抵抗なし」反応が多い傾向が見られ (Table 5)、15 図版では、「死や罰の受容、成仏」反応が多い傾向が見られた (Table 11)。

以上より、重要な他者との死別を体験していない者は、「死」を具体的にイメージすることが難しいと考えられる。また、死者と、自身のイメージの中で関わるという体験は、重要な他者との死別体験がある者特有の体験であると言える。一方で、有意傾向ではあるが、受容のテーマが多く語られている。しかし、「死」への抵抗は少ない可能性が示唆されている。死別体験のない者は、死の不可避性に直面した経験がないため、葛藤を経験したことがなく、抵抗のテーマが語られないと考えられる。また、受容のテーマが多く語られているものの、実感を伴ったものとは言い難いと考えられる。

2. 死-生-自己マトリクスの各群による無意識的な死に対する態度の違い

1) 「死-自己」分離群 有意傾向ではあるが、「死-自己」分離群について、TAT 反応から以下のことが言えた。

①「立っている人物の死」が多く語られる傾向が見られた (Table 7)。イメージとしての「死」は近いものである可能性が示唆された。

②「墓の中の対象への関わり」がない傾向が見られた (Table 10)。

「死-自己」分離群は、「死」と「生」, 「生」と「自己」は近いが, 「死」と「自己」を離して捉えている群である。TAT 反応から, 有意傾向ではあるが, イメージとしての「死」は近いものの, 死者と関わるというあり方の少なさが, 「死」と「自己」のみ離すというあり方に繋がっている可能性が示唆された。しかし尾方・岡本 (印刷中) は, 「死-自己」分離群について, 「死」は「生」きている「自己」の不確かさとは隔たった, ある種理想のような位置づけを担うとしている。「立っている人物の死」の語りには, 病気などで死ぬという内容だけでなく, 罪悪感による自殺や, 処刑なども含まれており, 「死-自己」分離群にとって「死」は, 不確実な「自己」とは隔たったという意味で離れたものであり, 不確実で罪のある「自己」を終えるという意味で「死」が存在している可能性も示唆される。

2) 「死」分離群 「死」分離群について, TAT 反応から以下のことが言えた。

①15 図版では, 「立っている人物の生」の語りが少ない (Table 8)。

尾方・岡本 (印刷中) は, 「死」分離群について, 「死」には明確で特徴的なイメージが見られない点が特徴であり, 日常に生きる「自己」に軸足を置き, それを脅かす「死」を日常から切り離して捉えているとしている。15 図版のような「死」のイメージが喚起されやすい刺激に対して, 「生」のテーマが表れないということからも, 「生」と「死」は完全に隔てられたものと捉えていると言えるだろう。

3) 全分離群 全分離群では, 12M, 15 図版とも, 各観点において有意な結果は得られなかった。尾方・岡本 (印刷中) でも, 全分離群では, 「死」「生」「自己」それぞれにおいて確固としたイメージが見られていないが, 「死」を知ることと, 意識上の死の不安の高さに関連がある (尾方・岡本, 印刷中) とされている。すなわち, 全分離群においては, 「死」を具体的に捉えることによって, 意識的な死の不安が喚起される可能性があり, それが「死」「生」「自己」の分離に繋がっている可能性が考えられる。しかし本研究では, 全分離群の人数が極端に少なかったことも, 有意な結果が得られなかった要因と考えられる。

4) 全近接群 全近接群について, TAT 反応から以下のことが言えた。

①15 図版では, 「立っている人物の生」の語り有意に多かった (Table 8)。

全近接群の他の群との違いは, 「死」と「自己」に近いことである。15 図版のように, 「死」が連想されやすい刺激に対して, 「生」のイメージが見られることから, 「死」と「生」に近いものとイメージされていると考えられる。一方で尾方・岡本 (印刷中) は, 全近接群について, 「死」をポジティブで身近なものとして捉え, 「生」「自己」にネガティブなイメージを抱き, 「自己」を「矛盾した」アンビバレントなものとして捉えているとしている。つまり, 15 図版のような暗いイメージの刺激に対して, 「生」のネガティブなイメージが喚起された可能性も考えられる。

### 3. 結論と今後の課題

本研究では, 重要な他者との死別体験をどのように体験し, どのように向き合っているのかとい

うことを検討すること、また、死-生-自己マトリクスの各群が、どのように「死」を捉えているのかを検討することを目的として調査を行った。

重要な他者との死別体験がある者となない者を比較した結果、死別体験がある場合、「死」を具体的にイメージし、死者を自分の中に描き、関わり続けるあり方が見出された。また、死の受容に関して、「死」を事実として受け入れるということだけでなく、死者と自身の中で関わり続けたり、「死」のイメージを自身の中で具体的に描いたりすることが、「受容」や「死を乗り越える」ということに繋がる可能性が示唆された。しかし、「受容」とは非常に困難なテーマであることも示唆された。

各死-生-自己マトリクスにおける語りの特徴を検討した結果、15 図版のような「死」が連想されやすい刺激に対して、「死」分離群は「生」のイメージが表れず、全近接群では表れたことから、「死」分離群にとって「死」と「生」は完全に隔たったものであり、全近接群にとって「死」と「生」は近いものとイメージされていると言えた。しかし、全近接群の「死」と「生」の近さについて、「死」を肯定的に捉えているだけでなく、「生」のネガティブな部分と結びついている可能性も考えられる。また、「死-自己」分離群では、有意傾向ではあるが、イメージとしての「死」は語られるものの、死者との関わりに関する語りは少なく、そのようなあり方が「死」と「自己」のみを離すという捉え方に繋がっている可能性が示唆された。しかし、「死-自己」分離群にとって、不確実で罪のある「自己」を終えるという意味で「死」が存在している可能性もある。また、全分離群について TAT 反応から有意な結果が得られなかったことから、それぞれの群の「死」の捉え方について、今後、TAT 反応の語りの内容からより詳細に検討していく必要があると言える。

#### 引用文献

赤塚大樹 (2008). TAT 解釈論入門講義 培風館

デーケン, A. (1996). 死とどう向き合うか 日本放送出版協会

Freud, S. (1926). *Hemmung, Symptom und Angst*. Wien: Internationale Psychoanalytischer Verlag.

(フロイト, S. 井村恒郎 (訳) (1970). 制止, 症状, 不安 フロイト著作集 6 人文書院 pp.320-376.)

藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ——テキストマイニングによる分析—— 関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-155.

石坂昌子 (2003). 死の意味づけの質的検討と量的検討——死に対する心理の理解 (1) —— 日本心理学会第 67 回大会, 300.

石坂昌子 (2004). 死の意味づけの関連要因の検討——死の対する心理の理解 (2) —— 日本心理学会第 68 回大会, 289.

隈元みちる (2003). 死別による生の意味の変化に関する一考察——「異界」との関わりのなかから—— 心理臨床学研究, 21, 25-33.

松下姫歌 (2000). Grünwald の空間象徴理論における「死」の象徴性の二側面 箱庭療法学研究, 13, 73-87.

松下姫歌・尾方 綾 (2009). 死別体験と「死」のイメージおよび死への態度との関連 広島大学大

- 学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域), **58**, 159-168.
- 信原孝司 (1997). 死別による配偶者喪失後の悲哀過程に関する一考察——中年期の突然の死別がもたらす悲哀過程について—— 広島大学教育学部紀要第一部 (心理学), **46**, 95-100.
- 尾方 綾・岡本祐子 (印刷中). 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ 広島大学心理学研究, **12**.
- 小此木啓吾 (1979). 対象喪失 中央新書
- 鈴木睦夫 (1997). TAT の世界——物語分析の実際—— 誠信書房
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, **70**, 327-332.
- 丹下智香子 (2002). 「死」からの連想語の KJ 法による分類——死生観の構造の検討—— 名古屋大学紀要, **49**, 157-168.
- 丹下智香子 (2004). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, **15**, 65-76.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation of a death anxiety scale. *The Journal of Psychology*, **82**, 165-177.
- 山本和郎 (1992). 心理検査 TAT かかわり分析——ゆたかな人間理解の方法—— 東京大学出版会
- 山本 力 (2010). 死別に伴う「悲嘆夢」が遺族の喪の仕事に与える影響 心理臨床学研究, **28**, 50-61.
- Worden, J. W. (1991). *Grief counseling and grief therapy*. New York: Springer.
- (ウォーデン, J. W. 鳴澤 實 (監訳) (1993). *グリーフカウンセリング* 川島書店)